

目的

高齢者に対する経皮内視鏡
的胃瘻造設術施行後、経口
摂取が可能となり経管栄養
から離脱ができた症例につ
いての検討

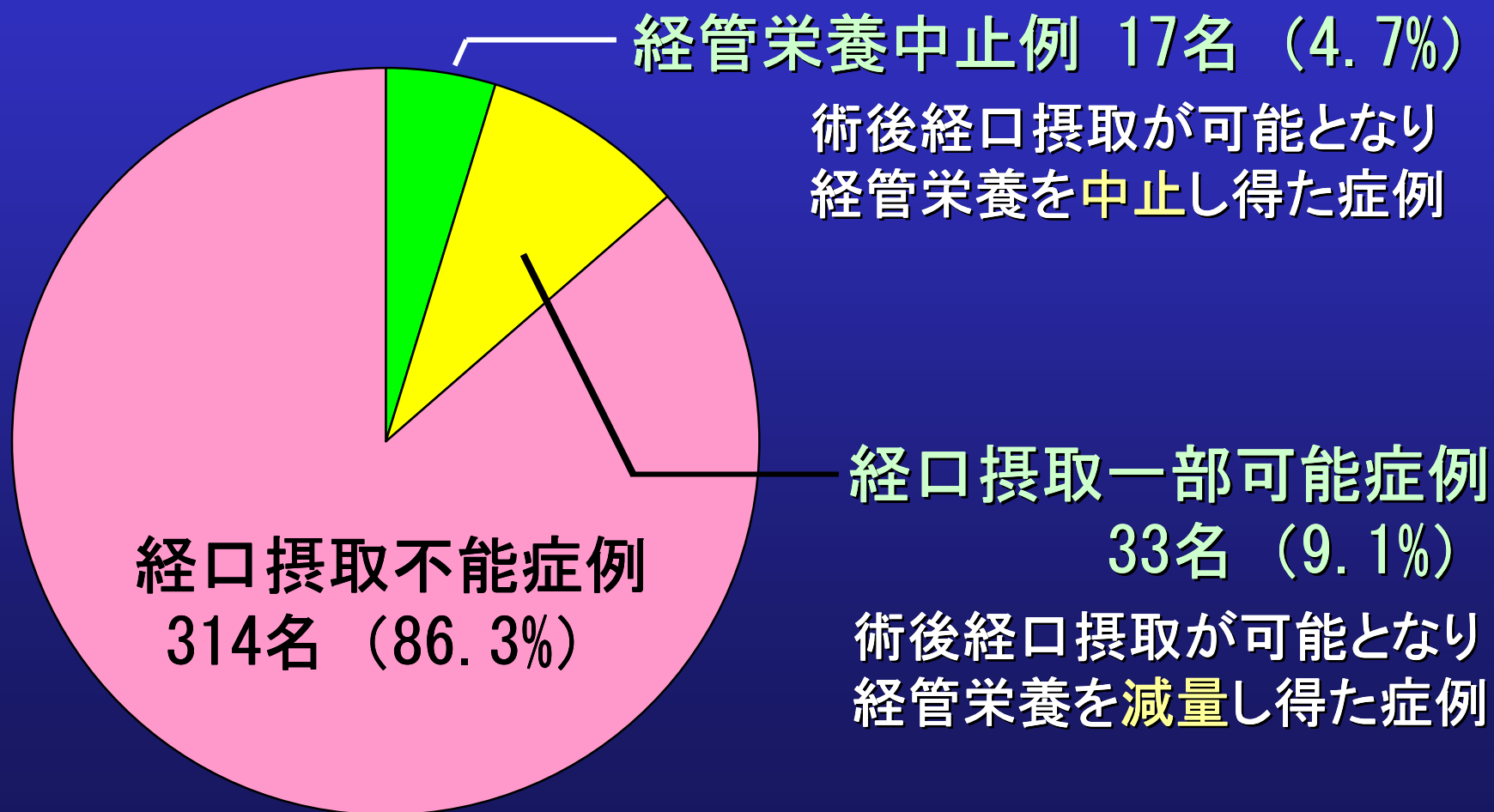
対象

65才以上の症例に対して施行された
経皮内視鏡的胃瘻造設術施行症例中
術後に経口摂取が可能になった事により
経管栄養が中止となった症例

症例数

364名(男145名 女219名 平均年齢80.0才)
内 経腸栄養中止症例 17名(男2名:女15名)

経口摂取可能症例の内訳



經管栄養中止可能症例

名前	年齢	性	基礎疾患	術前栄養投与法	合併症
I.K.	78	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	無し
F.M.	80	女性	痴呆	経鼻胃管	無し
H.T.	87	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	無し
O.U.	89	女性	痴呆	経鼻胃管	無し
M.K.	83	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	無し
H.A.	85	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	無し
A.M.	85	女性	痴呆	経口摂取	無し
S.N.	82	女性	脳梗塞後遺症	経口摂取	無し
Y.H.	81	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	無し
M.G.	92	女性	痴呆	中心静脈栄養	無し
O.H.	71	男性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	肺炎、胃潰瘍
K.S.	87	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	無し
F.T.	76	女性	脳梗塞後遺症	中心静脈栄養	無し
H.H.	85	女性	痴呆	中心静脈栄養	皮下膿瘍
M.T.	85	男性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管	皮下膿瘍
A.T.	81	女性	脳梗塞後遺症	中心静脈栄養	無し
M.M.	82	女性	脳梗塞後遺症	中心静脈栄養	無し

経管栄養離脱例と非離脱例の差 ①

—基礎疾患の差—

	経腸栄養離脱例		経腸栄養非離脱例
脳梗塞後遺症	12名 (70.6%)		145名 (41.8%)
痴呆	5名 (29.4%)	**	125名 (36.0%)
その他		n. s.	77名 (22.2%)
計	17名		347名

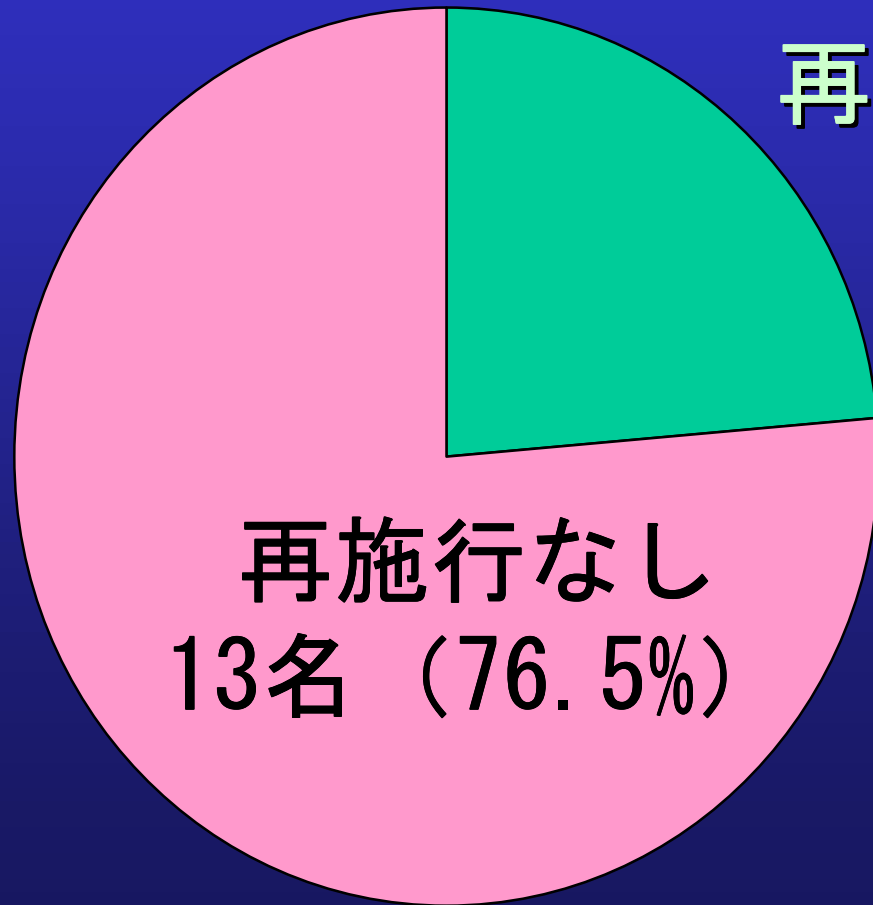
** ; p=0.019

経管栄養離脱例と非離脱例の差 ②

—術前経腸栄養投与法の差—

	経腸栄養離脱例		経腸栄養非離脱例
経鼻胃管栄養	10名 (58.8%)		212名 (61.0%)
中心静脈栄養	5名 (29.4%)	n. s.	97名 (28.0%)
経口摂取	2名 (11.8%)	n. s.	38名 (11.0%)
計	17名	n. s.	347名

再胃瘻造設症例



再施行あり

4名 (23.5%)

経口摂取が可能になった後、状態の変化により経管栄養が必要になり、再胃瘻造設となった症例

再施行なし

13名 (76.5%)

結果

- 364名の高齢者に対して経皮内視鏡的胃瘻造設術を行い、うち50名(13.8%)が経口摂取が可能になった。
- 経口摂取が可能になった症例のうち、17名(4.7%)が胃瘻栄養からの離脱が可能になった。
- 基礎疾患では、経管栄養からの離脱群が非離脱群に比して脳梗塞後遺症が高頻度であった。
- 経腸栄養離脱群と経腸栄養非離脱群の、術前栄養投与法の割合には有意差はなかった。
- 経腸栄養離脱群のうち4名(23.5%)は、その後の状態の変化により再度PEG栄養が必要になった。

まとめ ①

- PEGの適応となる症例の一部は、経口摂取が可能になることにより、経管栄養からの離脱が可能になる。
- 経管栄養からの離脱は、脳梗塞後遺症を基礎疾患に持つ症例で、その可能性が高くなる。
- 経管栄養からの離脱は、経鼻胃管からの移行症例のみならず、他の経腸栄養投与方法からの移行症例でも同様の効果がある。

まとめ ②

経管栄養からの離脱例のうち、一部の症例では状態の変化により再度胃瘻栄養が必要となる場合がある。

そのため胃瘻の閉鎖においては適応を慎重に選択し、再度適応となる可能性のある症例は、ボタン型胃瘻チューブなどにより、瘻孔の確保を行うことが望ましい。